

安政六年大倉六蔵東海道紀行文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大谷, 節子 メールアドレス: 所属: 神戸山手女子短期大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-139

Title	安政六年大倉六蔵東海道紀行文
Author	大谷, 節子
Citation	文学史研究. 33 卷, p.90-106.
Issue Date	1992-12
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

『安政六年大倉六蔵東海道紀行文』紹介と翻刻

大谷 節子

ここに紹介、翻刻する大倉源次郎氏蔵『安政六年大倉六蔵東海道紀行文』(仮称)は、小鼓大倉流長右衛門家十一代大倉六蔵宣義(宗哲)の手になる、和歌、狂歌、俳諧を交えた紀行文である。縦一四三耗、横三九七耗、三十八丁の大福帳綴一冊の表紙には宣朝筆で「安政六年當大阪にて祖父六蔵勸進能番組及途中紀行文、本日虫干之中お出候。御一覽被遊度。大倉宣朝」と書付けがあり、安政六年五月十二日から六日間、大坂橋村常舞台で行われた勸進能に出演のため、江戸から大坂へ向かった宣義の作と知られる。宣朝は、宣義の孫。長右衛門家十三代にあたる。曝書の折に祖父の筆を見出し、誰かの閲覧に呈した旨記すが、宛先はわからない。当時五十三才の宣義はこの勸進能の主催者であった。大坂での勸進能は、幕府の許可を得た後、大坂町奉行所を介して催されたが、興行の間隔は江戸時代を通じて一定ではなかった。幕末のこの時期は、金春八左衛門安住の嘆願、画策によって二年に一度になっていたものが天保十四年鷺仁右衛門主催の勸進能興行以来五年に一度に戻されており、主催権を得るのは困難であったと思われる。本書によって宣義の跡を辿れば、弥生晦日に江戸を立去る。卯月十四日に大坂両町奉行所に到

着の届けを出している。この間、十五日。「いそち余りの道すから、名所を聞、又、めづらかなりし所をも見侍りては、古しへを感じ、旅のつれ／＼に、其俣を紀行にしるすのみ」という書き出しには、旅中の慰みとはいえ一編の紀行文起筆の気負いが感じられる。所載の歌、俳諧に付された点が誰かに乞うたものか、自点のものかは不明であるが、推敲の筆は宣義自身のものである。大倉源次郎氏の許には、宣義が写した「詠歌一体」や、勅撰和歌集の版本等も若干残されており、宣義は、自らの書齋を緑地書屋と名付け、自身、亀同(希道)と号していた。鶴と亀の絵柄の朱印、緑地の朱印を付した宣義書写本も数点存する。宣義写「沢庵和尚詠千首和歌」の三十丁裏に記される識語「文久三年正月稽古休之内写之也 右先生お借用千時慶応三丁卯春於緑地書屋写之 弥生半写畢 四百八十三首也 泰宣義」には先生より本を借用したとあり、その先生の何人たるかは未詳であるが、宣義に文事に関わる先生のあったことが窺える。猶、同じく宣義写の「兼好家集」「一休禪師咄」「朝日のめくみ」の奥書には「竹長社龍王院宝寿法印」、或いは「龍王院法印戊戌金」蔵書よりの書写の旨が見える。龍王院は、都内太田区羽田の竜王院(江戸

名所図説」に載る要島并財天の別当寺）かと思われるが、当寺には特に関係の資料が伝わらないようである。江戸期の能役者の文事は、殆ど知られておらず、和歌等を含む紀行文である本書は、これを頼りとする好資料といえよう。加えて、本書は勧進能主催者の記録としても貴重である。同勧進能で「三井寺」他四番の小鼓を打っている村井権蔵のみが、同行の弟子として見えているが、追分迄迎えに出向いた四人を加えて十二人と書いていることから、江戸住の弟子を率いての八人旅であつたらしい。更に、難波津迄の迎え十二人程を加えると、同勧進能での六蔵弟子の出動人数二十五名にほぼ合致する。大坂滞在中の宿所は、在坂の弟子小松原伝右衛門の斎藤町の自宅であつた。猶、「御用初役祝納帳」によれば、六蔵不在中は大食利三郎が留守居役を務めている。その他、大倉源次郎氏のもとには、当勧進能時の刷り番組三種や、「興行上坂御祝物帳」と表書きされた、祝儀の書留が伝わっており、番組の内二部には、当日の役や曲順の変更、天候による順延の日付が書き込まれている。「興行上坂御祝物帳」については、関連資料として末尾に翻刻を付した。

本書の調査は、平成三年八月、平成四年八月の二回に亘り、伊藤正義先生と御一緒に御宅へ伺い御蔵書を拝見した折に行ったものである。閲覧、翻刻を御快諾下さった大倉源次郎氏に心より感謝申し上げます。

凡例

- 一、漢字は原則として通行の字体に従った。
- 一、仮名は通行の平仮名に統一したが、一部片仮名を残した箇所も

ある。

一、清濁、振仮名は底本のままとした。

一、適宜、句読点を付した。

一、虫損、汚れ等による不明、難読箇所は、□で示した。

（表書き）

安政六年當大阪にて祖父六蔵勧進能番組及途中紀行文

本日虫干之中令出候。御一覽被遊度。

大倉寛朝

（本文）

安政六ひつしといふとし、

おほやけを願ひ奉りて、御ゆるしありて、御いとま給り、弥生のつもちりにあつまを充足しければ、
のふよし

へ春のくれ初の駅路ふみ出てみちのくさくつゝゝることの葉

こたひ門出て、元より無学にして、詩文もしらす、和歌の道もわきまへず、只、いそち余りの道すから、名所を聞、又、めつらかなりし所をも見侍りては、古しへを感じ、旅のつれ／＼に、其假を紀行にするすのみ。弥生の末ノ十日、吉辰として、門出を祝ひ、辰の刻に出たち、品川宿を打過て、釜屋といふ所に休。見立の諸士三拾人程も送られ、態々祝盃をいたし、川崎、神奈川を打過て、はや程もなく春も夕附きて、折ふし春雨の降出し、静けき心にて、程ヶ谷の駅を泊にして、湯あひ、夜食等も調へ、初泊りにて、寝もやらず、

へ春雨に跡ふり向や初の旅

へ跡もおもひ難波へ急く春の暮

卯月朔日、はれたり。小雨朝少々ふれり。程ヶ谷を六ツ時出立て行

程に、むさし、さかみの境木村、矢岩坂、やきもち坂、

へつまもなしやき餅坂を苦なくこえ夫とある身のおもひこそやれ
此狂哥、人にはげしかたかるへき。戸塚の宿くに出ければ、

へ更衣初て見るや戸塚富士

原宿道場坂を過ぎて、藤沢に出ぬれば、

へ尊きと藤沢山をふしおかみお江戸に同しまちの賑はい

同じ駅、若松といふ所にて昼休しつれば、朔日なれば一盃とおもひ、
一ト徳り出させせけれど、いやに匂ひありて一口もいけず、

へ朔日を祝ふおみきとおもへともいた、きかねつ匂ふ若松

かとりひきの四ツやといふを過行ば、馬入川といふわたし、舟渡し
也。こへてやわた村といふ所に出て、平塚にかゝる。はたのけしき、

古名を聞侍りて、

へもろこしか原も昔の名にしおふ今平塚は稲くきの跡

山下迎來寺よりけはひ坂をやすみて、此辺ねこ一向見へす。風と茶
くみ美人に聞侍れハ、猫も少々は居り候よしを聞て、

大磯の昔名高き虎の跡いまひきかえて猫の少々

小いそにて鴨立沢を遠く見てとまりをいそく夏の夕くれ

前松といふ所にて、

前松の青海原はひとつらにけしきそまさる豊年の菱

同じ右りを見渡せば、

高津波気色も能けにみゆれとも夕日影さすふしのしら雪

さかわといふ渡し、小川なれともれん台にて渡す。着は小田原の駅
也。此辺に八方八ツむね作りのみせ、外郎の名物あり。各宿江泊ぬ。

古木松朽、又生出たる。鎌倉の時代ありしといふを聞て、

へ鎌倉の盛りし時の名は残り二本の松の根は深く見る

卯月の二日晴天にて、寅ノ中剋過キ、小田原を出て、大久保侯御城
下を通。山江か、り、谷川のけしき、風景極宜敷。扱、箱根山間及
にし合扱々難所なりしを、雲介共むた口を聞ながら、かるくど駕
籠をかつき、所によりかご二挺一ツばい位の道を左右へかつき、実
かんしん。かごの中、竹筒花いけ水今朝十分に入て有し、少しもこ
ほれず。山下りきはにて、長州の太守下りにて行合。矢張御かこと
行合のおりから、持合之通行也。夫は権現坂下り、余程けはしき坂
下り切、左りの方へ行。右に足高山青々と見ゆる。箱根山も高根は
はけ山也。向いて左より下は、草木あり。駅中のかこ雲助の名人な
り。感しは、登り山の節は、前へせいひくを廻し、下り山には、前
へせ高きを廻し候。尤、三人の極メにて、兩人にて前後高ひくを分
けて行也。

へ勇ましく苦もなく登る箱根山つ、らおりにそあゆむ雲助
人足の勇氣ぶん／＼として、実生堅たり。唐土天竺にも有まじと思
ひ侍りて、狂歌にかくなん、

丁半と女咄しのにこりなくこゝろそ清き日本雲助

雲介を賞くわんして、

日本の其名そ高き不二の山すそのにかよふ雲助のかた

へ家ことに湯本細工の美しきくたりにかふと言捨て行

都て手遊び、又日用の品々、大きい物も、又愛らしき品々、あれも
ほしく是もよしと、めうつりのして、

へうつくしき湯本細工の品々をあれにしようか是にしようか

へ妙なれや箱根の山の峯深みみつうみはれて月のけしきは

関を越過ぎて初音を聞侍りは、

足柄の関をも越て程もなくはつ時鳥聞そうれしき

へ関守も一ト声やきく時鳥

箱根白井七郎右衛門手代、湯本迄迎に差越、案内。昼同所にて本膳出す。外に定式の三種、酒、吸物と馳走す。山中は笹谷助左衛門方、是へは立よらす。休所へ同方ゆて玉子、くき団子、二重差越。何れも相当挨拶祝義等さし出し、立。

快晴にて山々の景色を見て、

へ段々と畑に穂波も衣かへいつこのはても豊年の菱

詠めく行程に、三嶋の社を伏拝みて、社料五百三十石とある。

へさかみをは早打過ぎて伊豆のこう三嶋の神の古き大宮

大社にて古かなり。おしきかな大破にて、夫々寄進の掛札はありつれと、其俣なり。前に書落して爰に出す。箱根の権現、こうくたる古宮なり。是は修復も調て立派なり。大門の内に、大鐘頼朝公の陣かね、井大がまあり。芝山内の鐘より大廻りも大きく見ゆる。凡七百年にも相成らん。

へ足からの関を越へ行初旅に夕日にかすむ浮しまかはら

こなたなる並木の系きを通りしに、雲介の曰、けふは晴し天気なれは、いまに足からのふもとに小うまの多遊び居る。定て見へ申べし。去ながら杖を置やすみ、此通りをしつかに見給へ、と申。左の方能々見候へは、はるかに遠く大き、いぬ位に見へ、青鹿毛月毛黒の色はわかりぬ。

へ足柄の山のふもとを見渡せはむらかりあそふ若駒の数

三嶋の駅路行過て、きせ川といふ渡しに出る。船にてわたる。行程

に、するか路にて夕七ツ半過ぎ、沼津の宿に着ぬ。泊米屋と申家、

きれいにて、尤城下ゆへ宿も賑々敷、三種に一斤を差出す。卯月三日晴天にて、正卯ノ上刻、沼津を出立。千本の松原にか、りければ、

へあけほのに富士の高根はしら雪の原より見れば系にもおよはす沼のうなき、柏原という所の名物、小橋を越へて両かわに、十五六七の娘斗、白粉をぬりつくり立て、うなきをやきながら、ヲハガリナサるく、ヲハイリナサキト、皆々揃ていふ。拍子に団扇をばたくしへさしてあるなれば、朝のことなれば、かばやきには早し、

へかしは原うなきの味は旨くなし娘のあじはうまさうに見ゆ

西は富士東を見れば大野原古ほく若松一トつらに見る

原にて見るふじ、けしきよし。

富士は原本吉原の名もゆかし

吉原宿にか、り、真向に名山を見。殊に晴天にて一しほ面白く、目の保養、いふにいわれぬ其けしき、

へ名に高き真向の富士を吉原にけふそはしめて見るそうれしき右へ行程に、雲介のいふ。今に少しまがり候へは、日本一景の左りふじ。見給へ、とい、ながら、かこにて行。杖をし、爰なりとて、一腹なされといふ。むへなり哉。誠につかの間斗也。

へ吉原や東の間に見る左り不二

高根よりすそ野々はてはかきりなく三国一の実も名山

甲斐の国山は近くそ見えつるに身のふのおやま程遠く見ゆ

此辺に名所浮嶋か原、田子の浦、誠に目を驚すけしきにて、何も出来ず、只々遠見のみ。程なく富士川に出る。川原余程長く、本陣用

間、齊藤條右衛門自身、迎に出、船等の世話。尤、別船一艘外荷物一艘出。水も誠に少々にて、乗船いたし、青竹のさほにて御船を出し申といふ間に、一さほにて着船。扱々早き瀬、水まし候は、厳敷と被存候。あまり早さに、

へふじ川は荒き渡しと聞つるにのと思ふにいつか着きにし

齊藤宅門前へ出迎ひ、小休。上段の間へ通し、丁寧に致し、蔭絵二重組八寸へのせ、ふた物に三盆入、しほけたくあん、塩引つくり入ある。当所の手作りの本新茶出す。中々匂気能、色もよし。弟子の方へも次にて出し候よし。

へ齊藤の馳走に出す組重のくりのこ餅のあしはひのよき

栗の粉の餅の祝義やおそ桜

一札をのへ、藤川を出る。弟子共申、御なくさみにとて雨畑硯石相應の所、進物とす。何れ下りの節をの心なるべし。夫合岩淵を通るに、右の方、毘沙門堂あり。拝礼す。程なく蒲原の系きにかゝり、

へ蒲原の左右の山々松原にひかしを見れば一つらの海

かん原路より中村といふ所を過ぎて由井川、是は小川にてかちわたる。かこのま、人足渡る。水少々なり。由井、色々名所物語等あり。昔のことをくさくさおもひて、

へ観音の利生尊く古ことをおもひそ出る由井か浜かな

是合一里あまり、さつた山にかゝる。此峠、前は上の方通行、今は下の方浜を駅になる。峠のけしき、下合見るに、実赤へきの山水とも云つへし。石木土気の色とり、唐土の山水の如く見る、妙景たとへん方なし。

へ夏しらぬけしきはるやさつた富士

へ唐土のけしきは絵にて見るはかりさつた峠の夏の景色
打過きておきつ川江出ける。

へ沖津川こえてそ涼し清見寺

清見かた鐘の声きく庵原の村に夕つくともりいそきて
鐘の声ひく奥津の清見寺

へ三保の入江清見淵をもち見れば田子のうら波詠めつきせぬ

けさも早立にて、七時半時江尻の宿に着ぬ。今夕は風呂も別してきれいのよしにて、湯に入。京屋と申宿よろし。あたらしき鯛さしみ、同煮付差出す。茶うけにいたし、あすは川にて色々申付事、都て夕

剋迄に相調ひ、い寝にけり。卯月四日晴天にて、江尻の宿を寅ノ中剋出立。同所、坂あり。ほのくに山見へければ、曰、

へ足高の山も見へけり江尻坂夏とおもはぬ風の寒さよ

小吉田漸々軒をひらき、すしをこしらへ初にて、休にも早く、小休へ持行んと、数々小桶を調て、

へ小吉田のすしは格別あじそよき二八娘かつけるとおもへは

此辺三穂の松原羽衣の故事あるよし。小よし田、海道合六七丁りて、

へ富士浅間両権現をふし拝み社領も多く宮の尊き

右、社縁二千六百石の御朱印のよし。はやくも府中の宿りにかゝり、大手、其外小さき

御城なり。町も江戸の通り家作り、

へ思ひ出す江戸の若葉や府中町

府中町卯の花付し牛車

御城下を打過ぎて一里半あまり行て、あべ川。此川手前に茶を多く
うる家あり。折よく水少々。漸々三り迄も無しても、れん台渡し。

此辺、しづはた山、こからしの森とて景色よき詠めなれば、

へしつはたの山を詠めて木からしの森を見ながら渡るあべ川

こへて、まりこの駅に出る。板橋ありしを、

へ板橋をふむや鞠子の森手島

へ水はなしよし切ありや鞠子川

かちわたり、ひた／＼水を渡る。うつの谷へ出る。此所、風流の駅

にて、わうかんとは思はぬ細道にて、申さは、大名の下屋敷の様、

外山尾公の様成る所。小山清水流れ、板橋巾

せはく、所々にかゝり、

へ本道とおもはれぬなりうつの谷ののほりくたりてつたの細道

へ風雅なりうつの谷峠枝蛙

箱根大井川辺のけしき、盛久の道行、加茂物狂とやらんの謡曲に

ある通りに侍る。江月宗叟の、謡とやらんを聞て十徳の利有と。王

公卿大夫等、聞謡座名所知とある。むへなるかな。うつの山を越て

岡部のしゆくに出けれ。早、午ノ刻前なれば、昼けをせんと、名も

なつかしき江戸といふ大店江立寄。下にも夫々支度し、右飯を申付。

何か魚と、村井へ聞せければ、今朝初ての饗、極よろしきと小娘申

旨。扱、一考。江戸の初饗の趣意もあり。村井申は、いか程からさ

しみに仕哉、可聞と申。至極の事。彼小娘の曰く、ハイ御老人前、

おさしきは百銅が出来ますと答。兩人は大家心。一笑す。先ッ、武

人前さし出。直敷は又々可申と。扱、見事につくり、今渡りの染

付相應のさらへひひどろのすたれを敷て出す。まづ一寸五拾疋外に

見へる。せの方、ひとふしに銀かわをあしらひ、三段につくり、紫

のみたであしらひ、おろし大根のめしを被下候所、さすか目を驚し、

一盃初饗にたいし、少々と聞候所、極上の地酒一合、廿八銅が余程

よろしく申。いやいけまいと申を聞て、小娘口へ一盃持来り、村

井へ出す。是は江戸にてかまや、此かたの御酒也、と申。左候へは

小二斤もつけさせと、やかでかん持参。久々にて、一盃のんどへ

入候。各大つくりにて、兩人にて被下されす。あまりきのど／＼きに

吸物を申付候所、鯛の小身所本向の目頭うしほにて、蓴菜をあしら

い、花柚甘うしほにたつふり。わんも利休のためぬり、糸目茶気の

膳わん、さすかに名も江戸屋程あり、感心。各店娘共、いづれも田

舎物にてなく、言葉江戸風。上下分て物しとやかにて、しばし一酌

かたむけ、余りは酒のよきに持参のひきこへ入させ、扱、半例心を

聞せ候所、不残にて四百拾六銅に直敷旨。尤、ひきこの分は表方私

の内へ入。昼仕度は銘々初饗にて、主人おごり也。あまりきのど／＼

に付、南一遣し、残り茶代と申遣候。尤、奥の別間に居候間、女も

入来らず。備の所、ていしゆ札に出来り、赤面の至に御座候。あま

り安直にて記置。

へ岡部宿殊に江戸屋の初松魚

此辺、せと村といふ。そめ飯軒ならひにあるよし。茶飯、きから茶

のるいと見へたり。藤枝にかゝる。此辺より大山見ゆるなり。

へ奥ゆかし咲かゝるなり藤の枝

せと川迄の手前、左右茶の木多し。折ふし娘共つみ居て、着類も

きれいの給、ひとへもあり。其村の揃いと見へて、新敷手ぬくい、

色々ありて、いつれかむり、やさしき声にて茶つみの好うたひなか

らつむ。ふかき小ざるに又大きざるも、皆々一ツ手持、絵にかけることく也。哥文句を聞候へとも、わすれて記さす。

へ藤枝の娘揃つて茶つまかな

へせと川にくれなはとらん堂かな

此せと川、小砂利斗にて、水はひた／＼、わうかんのことくにて渡る。青嶋島田宿に入る。

へ夏す、しここにしま田の洗ひ髪

此宿にて休み、金谷定宿泊、河村八郎左衛門也。外泊ありて差支の趣、右家合頼合とて米屋五兵衛と申者、川迄迎に出。前後世話致、川越。水少々。腰切位浅き処は、さんり位もある。川迄二川原長し。所々板橋かゝり、夫を段々行。大井川へ出、連台かこ付、具足へ弟子老人付。同やりはかこの上へ付、渡る也。たばこみぶく程の間に無滞着岸。

へ大井川思ひし程に水落てやすくそ渡る心嬉しき

渡りて金谷の宿に七ツ半時少し廻りに着泊。米屋方相應の家、脇本陣之代りにて、河村合さし宿ゆへ、都て入念候。執扱宜敷、川渡歎として、三種に着酒。尤、くわしはいつれにても着に茶くわしは出す。其内行届てもあり、さつのもあり、此方にても祝義茶代も相当にて、百疋五拾疋。山川の宿は又別也。供の者へも夫々祝義遣て一盃のませる。主人何分小吉田のたねもきれ、茶斗にて祝ひ行也。卯月五日晴天にて、寅ノ中刻過キ金谷宿出立。

へ金谷よりいつか越へ来る日坂の屋家にうる。そあるわらひ餅かな。初ての事故、上の分一盆給りければ中々よろし。かはり都合二盆も給り、かこにて茶を入、至極也。上戸ならはいかん。色々神仏らし

き名目の山六ツ七ツあるよし。わらひ餅にも上下ある也。

へ道端に邪魔らしく見る夜泣石こえきく事もき夜の中山やまの中頃にて三四人連の内、両人都風舂の二八位十九やらんとおもふ美婦人を見侍りて、

へ青日傘うちぞ床しき中山にさか越へやらてかへり見る哉。此辺いづれも名物あめの餅、家ことにうる。薄き餅を合せ、中へあめを入。又、曲物入、しら玉あめ長く引延すもあり。

へあめの餅かふて二八と見し娘口とくちとに喰たらはさてよりしたものはしては山ハナ村を行過て掛川の系きにかゝる。城下道巾はせまきはあらとも、通り筋極きれい。大通りの内、中に石敷詰候所もあり。町々家何れも立派にて、人足等も人気よく、雲介の外、助郷も出る。相應のしまの拾着、帯小倉、身きれいにて、正直に三人出、かこを大事にかつく。腰には弁当付、丁場迄と見へたり。右ゆへ実舂也。都て城下の取締宜敷、辻番町の番屋も全ク二昼夜とも番をいたす様子に見へる。くす布店大家数間あり。いづれも店前うり子共拾四五人つ、板取帳相具服店の通行、中々大そう也。

へ掛川に軒端ならへし葛布店

掛川合間の宿、原川、ナクリ村打過て袋井の宿に出る。並木多、松の虫りん／＼と日中に鳴。とりあへず、

へ袋井の並木に鳴や松の虫

へみかの坂越て同じ名の橋打渡り見付を昼とうなきかは焼此見付、宿ことに服をあけ、大風なり。男女子共、新しき單物をいづれ着たり。雲介にとへば、五月節句は田植等ひまなく、昨今六日迄、男子ある家は節句の祝ひに一種もうけて、お江戸のはより甲入

形の所を、たこをあけるなりと申。

へ大風を端午祝ひや見付から

へ夏風や二三拾枚より張あけて

夫々絵も中立派、大うなり付。天気よく風も相応にて、村々に上げて祝ふ。又、茶つみを見侍りて、

へ卯の花の盛りに風のうなりかな

へ小娘も茶つみながらにたこそ見る

へ風のうなり娘は烟に茶つみ呀

見付八幡社拝して三百石御神料あるといへり。間の宿三宿打過て、天龍川に出。是も河原半道程也。河原が右左り山々を見るにけしき殊なり。先触の舟二艘出し有之。深き艇也。水落て少し。夫ゆへ河原猶長し。人足と申は、水増時は此辺を艇に來候よし。艇の内少々の間けしきはよろし。間もなく着岸。小休致す。間の宿、薬師新田打過きて、浜松宿に出ぬ。夕七ツ半時、同宿花屋と申宿に泊。浜松通り広し。幸橋外溝は表門の通り位立派なり。広き斗にて城下はきたなし。宿は賑やかなり。能き口取物、さしみ、二種出す。卯月六日、晴天。夕方少し曇。浜松宿寅ノ中刻出立。城下を廻り、間の宿、幸原、しの原、此辺海の方、味方ヶ原と申也。程もなく舞坂に出る。

へ舞坂を今切あげて渡しこへ名代のうなき工風持方

渡しに掛り、船宿の方にて小休。三十石艇一艘出す。中ノ間、広く晴天にて風少しもなく、座敷居かことく、茶たばこに山々の景、東南はいつくともなく青海原にて、

へ遠山のけしきは筆におよはれぬあら井の渡り波そしつけき

へ名はあらみ夏ぞす、しき風もなし

へ西北の山の詠めは一しほにうみは霞みてかきりしられぬ

荒井着岸。前田作右衛門、艇へ迎に参り、何か問所へ一言申様也。人足相揃候間、可上る旨申。直に上り、只通り候て宜敷旨、則番所過越、前田江昼休。肴二種、うなき二重差出す。尤、昼支度申付。又、懸意尾張公用立、尾張屋平吉御迎に可出着、御屋敷に着もあり。夫故、前田へ頼申は、帰りに是非立寄候様申。嵐から、かつうを、たい、中曲物二桶持参す。夫より弁当かはやく仕込。一兩日はたくわへはしら焼きて差上候。尤吟味致し可申付と右へ頼。一兩日の分貯至極能きあしに、安直也。江戸とは大相違、驚入候。荒井を立てて名におふはまなの橋を打渡り、名物程、橋の組かたかはるなり。

へ名に聞し浜名の橋を打渡り新茶をせんし納豆をくふ

へ納豆も夏だけからし嵐見坂

へ白頭かやさるかばんばの柏もち

程もなく三河にかゝり、二タ川宿の在を通りつるに、女、相応のなりにてつま折簀笠をかふり、子共も交り袖こひしに、何か哥のよふな事をうたひ、いづれも四ツ竹。

へ三かねなる二タ川在の旅の道四ツ竹拍子うつて袖乞

鳥目を道候へは、しきりと四ツ竹を打。中々風雅、面白しく。間のしゆく、わつか一ヶ所。三州吉田の城下相応に賑やかなり。此辺家毎にはくちひきこをうることも、軒ならひ也。

へ黒赤と山程店につみをきて見れば吉田のはくちなりけり

吉田の大橋、是は先年水嵐後掛直り新敷、誠に見事の橋也。中々東

の大橋は不叶也。長さ百二十間前後にて、間は六十間にも成べし。橋料三千石也。伊豆守殿持といふ。橋渡り、茶屋町多く、御油の宿也。扱、御油の宿、付当りに古宮あり。廻櫛立派也。出雲の大社を写し社なりといふ。是斗、外にもなしと申す。豊川稲荷鳥居海道に見へる。是も大社なり。御油を入り、左りの茶店、見事の藤あり。真盛り、誠に美しく敷。長さ四五尺六六七尺一面に花を持、目を驚し候。尤、隔年にて長短あるよし。長ふしやと申水茶や也。

へ永坂にゆかりもあるや永井藤

へ三河路のけふ廻り来て御油の里なくそたる、池の藤波
木の下と申にやすみて、夕つきければ、

へ木の下や泊りをいそぐ夏のくれ

雲介ともへ一盃のま、いそかせければ、飛かごとく、あかりなしに、赤坂の宿に泊ぬる。卯月七日朝曇四ツ時比合晴天。赤坂の宿寅ノ中剋過キ出立して、宝蔵寺長き並木や藤川のしゆくを通りて額田郡とはや岡崎の宿に入。城下広し。惣幹丁延中々御城立派に見ゆる。扱、名高きやはきの橋にか、り、あにおしき哉、四ヶ年已前の水流の節家数流て橋の真中大き家共打か、り、中程橋落、前後斗残り居。舩渡しに相成、御用舩出て渡す。扱々天さい可申様なし。長さ、京間二百八間也。橋料老万石、誠に日本道中の名橋、残念かな、いまた出来す。竹矢来普請小屋は掛りあれとも、中々急には掛るましきと見へたり。渡し舩より橋をみて、

へ名に高きやなきの橋も津波にてなか落にきを見るそかなしき
八橋寺、業平の故事、街道合十八丁程と申す。廻りかねて気色を聞侍りて、

へ三河なる昔名高き八ツ橋もいまは名のみに杜若かな
間の宿、中田村合池鯉鮒に出ければ、翌日は卯月八日成しかは、幸ひけふ虫よけの御守をいた、ければ、

へ宮さひて池鯉鮒の神をふし拌みむしよけ守りいた、きにけり
此御札、予小児あまたの内、虫氣にてよる位いたみ候節、外人ちりう様の御札をへその所へ付候は、腹の虫納候よしにて、右御守くれられ、其程おしへの通致置候所、葉合早速利生直に位やみにけり。右故多分に請置、人々の子にほとこし候事也。守をうけて、

へ虫よけや卯月七日に丁度うけ

へさかい橋越せは三河を跡に見て尾張の国になるみしほかせ

鳴海宿にか、り、家こと呉服店。両かわに、しばらく専一にうる店に反物色取かきあり。目うつりのして、ほしき端物其外半あり赤紫、誠にきれい也。少々大家の内、又こしる□方有之。右之四五反も調候。尾張領笠寺観世音を拝みて、

へ笠寺にあすのしたくや花御堂

川越て筑州側人宮本氏舩橋氏前後に成り、通違ひしに、今中休、茶店にて面会。一礼におよび、夫に付、供の者の咄に申。何宿とか先きへ筑前の家中具足やり、右にやりに筑前の鎗印有之。此方之印なし。跡合此方参り候ても間合場にて、かこ馬とも此方の先きに致し、筑前早くても跡に廻し申候由申候。やかていつか鎗印をとりて仕廻候や。此断は無之と申。とかく前後に成候。尤、主人はかまい不申なれば、家来ともト見へたり。扱々難有き物御座候。程なくいそき日一つばいに宮宿へつきぬ。此宿至て繁花の地也。宿やに沢山大家もあり。京屋徳兵衛方江泊丁寧の取扱。菓子茶もきせん仰之所、

茶入にいれ、きひようこんろ火鉢の外に出候。誠に座敷も美事。出し物器物極きれいにて、宜敷。夜に入、肴三種、酒別に出す。外の気色賑はひ候由咄御座候。夜みせも有よし也。卯月八日朝曇ゆへ六ツ時出立。昼より快晴に成候。江戸の通り、にきはふを見て、

へ賑やかさはらぬ夏や宮の町

宮の佐屋廻り船宿の事は、先夜京屋方へ問屋へ掛合済せ、佐屋船宿、伊勢屋儀左衛門方へ荷等廻し置、右宮宿のパンハ、カモリ、此道左右を見侍りて、

へ一つらに左右を見れば蓮花草おく手の菜葉幾里佐屋道

誠美敷蓮華草真盛り。長さ式尺位に延びたるもなり。余り珍敷ゆへ尋候へは、いつれ此辺、田ごいに用ひ候間、態々作り候ゆへのひ申。外のなり物に合ぬ土地也、といふを聞候。

へ毛氈を敷詰にけり美しき田ごいにおしき蓮花草かな

佐屋江着、船宿にて休。舟、つみ込出来、乗船。相應の船にて中は間九尺にて、ゆふくゝと居。風もなし。卯月八日なれば、

へ吉日よ佐屋川渡風もなし静けき波に居寝りそする

此舟三里と云。中程右の方長嶋にて、城下うら手通江うらて合小船にて、向の方へ色々調物等男女出る。急き不申候は、増山へ約束に付、立寄度候へとも、荷物等手重二付、うらは船で一見しける。川迄出候道、白あら砂にて、ざくりくゝ、老尺足ふみ込候ては、又流水あり。川迄、昨夕とか、薩州通行之由候。此所船橋を定式掛るよし。

手当百両ツ、の旨、其俣おきくれ、はよきと申答候。同勢通行渡候と直に取仕廻い候旨。大名はいつれもさや廻り、七里の渡しは先は見合の方よしとふ。都弁利は七里の方宜。人足もよし。扱、さや、

尾洲の持故川端こざ引、荷物を夫へおろさせ、両掛具足。両掛は一覺台出し置、夫へ直のせさせ、船役人迎に出。土下座にて都て取扱丁事に念入候。其節、薩州昨日通行の跡にて、此方的人数斗に候。出役致候者も有之様子に御座候。佐屋上り舩屋と申茶屋向に出る。

昼には余早く小休のみにて、舩屋を出立。やかて桑名宿也。城下大さく、是には大手の外、くる輪入付当に張番御紋付のま、江戸虎ノ門を入候様子也。左の方御城也。大手も見へて、余程行、御城内出る。夫の城下町也。此間イの宿、極長し。日永、ホシ川、町屋川。

へさや川を卯月八日に渡りきて日永になれば腹もすきけり

ほし川町屋川やかはの橋百六十間余、巾はせまく、先飯橋の様に、所々に左右人たまりの持出しある。色々曲りくねり、八段に橋か、り、式百間程もあるべしとおもふ。水は少し也。又、深き所もなるなり。

へ夏の旅実も日永にはし川のあさけわすれて二度の昼めし

へ桑名より時も日永に腹もへりやきはまくりを二度喰つ、扱、ことにはまくり多、松ぼくりにて焼、松葉ましりやはらき事、実妙に候。可喰。信に此辺大蛤なれともやはらかし。貝丸みありてした少く、実も丸くとして能かけんにやき直給り候へは、やはらかく、江戸のはまくりの大きしたかたく、夫とも変りて、した丸くやはらか成。時雨蛤も調へ場にてやかせ、誠に新敷と味合美也。是は名におふ名物の徳ありて、外にはなし。海の塩のあんばいにて、蛤の育方もかはるとなん。

へ名物の夏蛤の美なるかな

此間の宿々四所。誠に長き事。宮より九里十八丁の丁場なれとも、

四日市迄拾三四里もありなんとおもふ。昔、宗祇翁の狂野に、

○桑名よりくはで来たればほし川のあさけとなりぬ日永なりけり
此宗祇先生も、此丁場にはあきらめたと見へたり。段々急きく行
程に、七時半時過ぎ、四日市宿に着て泊ぬ。此宿へ入候。寺の外に
も水茶屋にあま茶御あかりなさい。あま茶く。田舎言葉にてゆふ。
かこより見つれば、

へ四日市甘茶あかれと化ケ娘

卯月九日極快晴。四日市宿正寅ノ中刻に出立。追分より右の方、石
の大鳥居、横丁街道少し引込てある。天照太神の御鳥居也。是へ
入候由。よう拝す。川に出る。

へ杖つきの川を渡りて行程に石の薬師の宿となるらん

四日市内往くわんへ出、右の方より敷瓦も並々大々の瓦ふき、殊も
大そうの家作り、大名やしきかと思へは、みせの様。入口に赤羽も
めんのれんありければ、雲介にかこの内へ聞は、伊勢中の大金持福
井や也、といへは、

へ家造りも手厚く見えて奥深し実かねもちと思ふ福井屋

尊き寺は門からしるといふかこく、余程に見立て立派の家作也。
扱、石薬師宿の内、薬師堂を見て、本堂の棟の左右に見付の通り、
鯨向合アルを見て、

へ鯨の御堂珍し石薬師

右二ヶ所同様也。又、庄野にも、

へ鯨の観音堂や庄野宿

愚案に其昔柳のやくらと見へたり。夫を堂に致し候物と思ひき。石
薬師の庄野、都て伊勢路の内、女牛斗にかろき荷を付て通行す。扱、

女牛には角へ赤紫ちりめんもみ掛け、結つてたり。都て、顔もやさ
しく見へければ、

へ紅脂のきれ角へ掛けり女牛

へつのにきれ牡丹うつくし女牛の荷

へ紅脂かけて若葉伊勢路や女牛の荷

牛若丸、植結ふさかさ桜を見侍りて、

へ御曹司何のわけかはしらねともさかさしくも見へる葉桜

此辺のせき川小河にて、水したく小石ありて、子共なそも入て遊
ふ。又、河原ありて、くさ生る所へ、小うし女牛くさはみ遊ふけし
き、やさしく見へて、

へせき川の清き流れに河原ありてくさはみ遊ふ牛のけしきは

庄野迄わつかにて宿へ出けり。いつみ川小田村あり。此川も清き流
水にて、土橋か、りて下たは、誠にまさき清らかにて、かちにてわ
たる。渡川也を見て、

へ土橋を渡るもおしき泉川まさこの清き水の流れは

左り方に八幡宮社あり。伏拝みて、程なく亀山江出けり。要かいの
よき城也。城下も賑はし。外曲輪の通り、右へ堀を見て、わうかん
也。

へ外曲輪桑名亀山堅固にと見なから行は都近づく

よき古茶やあり。通り過れば関川に出る。小船渡し也。越ればふせ
川あり。

後 関の宿に出ぬる。朝日弁天に詣て、

へ我のりしかこにも同じ神まつる猶守らせよ朝日弁天

前 関の地藏大堂也。右の方系ん魔堂あり。

追々に孫をそ願地蔵尊みの成る迄は我が願はなし

筆捨山の煎茶店に小休。寛々詠めくてもつきぬ。古法眼氣色を写さんほつすれとも、図とられす。其に筆捨之、則其名とせりと云ふ。

へ筆捨の山を初て詠むれば名家もさぞと思ひ出てつ、

唐土の西湖は名のみ聞なからわか松したに筆捨の山

筆捨の山の左りに遠く見ておともはるかに錫杖の山

へせがまれて詠めつきせぬ筆捨を見のこし立ていそく鈴鹿路早くも坂の下駅に出る。

へ夏の坂登りて行や坂の下

す、か山にか、りければ、

へ其昔鬼神の住し鈴鹿山けはしき谷に丸太橋かな

へす、か山のほり下りて越見れはみねも夕つくあの、松原

中々坂の下鈴鹿路、箱根山の子くらの山にて難所なりけり。狂哥にして追々町の方を見て、

へ鈴鹿より見下す宿の坂の下いそ数多く見ゆる飯盛

鈴鹿権現の社、田村丸の明神もあり。古宮大社なり。石燈籠数多あり。

大門合本社迄三丁余も山へ入ある。各々両かわに燈籠奉納ありて、古物多し。

へはや伊勢を越へて近江の夕す、し

へ土山はた、さし櫛にあめはかり古宮に見へる田村明神

程なく土山の宿へ七ツ時少々前に着、泊ぬ。卯月十日晩。夜九ツ時過合小嵐吹。明方合風つよく、東風雨交り、朝雨は少々なれと風やまず、出立見合。程なう風も静に相成、五ツ時過、土山出立。江戸

出立後、初て雨具出す。行程松の尾川、松の尾社あり。

へ土山や松の尾川の清ければ酒を守りの神の御社

大野いな川合水口にか、り、程なく風のやみ、小雨にて、駕籠桐油か、けたれは、きゆふよく見へす。水口の組物細工みせ、雨風ゆへ戸を引候て少しつ、明てありて、品々見へす。水口城下にか、りければ、城内の四ツ鐘聞へたり。能き鐘の声に聞ゆ。

へ夏あらしやんで渡るや横田川

へ三雲村晴れて涼しや石部宿

石部にて昼休み。雨具も道々にてかはき、夫々納メにけり。二里半余行は、梅の木に出る。草津に程近成て、

へ梅にはふ暑氣を払ふや和中散

空晴て右の向の方見渡せは、三上山青々と見へる。

へ近江路や昔むかての三上山

まばゆく、かきし扇して見つるは、

へ石部より扇子かさして三上山

梅の木を過て、京伊勢屋茶店見事成藤咲乱余花もなりて、藤棚に思ひく、当座即吟見へたる。

へ京いせ屋かこいねむりに目かきめてさかりの藤を詠めこそすれ

江戸とても同じ色成を、

へ紫の色やかはらん藤の花

へ葉桜に田楽うまし藤の茶屋

へ妻川と聞いてなつかし青すたれ

夕七ツ時廻り、草津宿へ着、則泊。伏見船宿池田や六郎平、夫々船支度申付。宿仙台や茂八へ申付、手配す。今宵晴て月こうくとし、宿の庭も広し。月を詠めて、

へ永坂も草津も同じ夏の月

名物うはか餅、別品なり。但、上下二通りあるなり。幾千世もかはらぬ春や姥か餅と印たるせん茶茶わん十六銅、廿四銅にて、望はうる也。うはか餅と斗あるもあり。子供にはまつうばなしに育たき事を思ひ、

へ子ともにはくはせたくないうばか餅

卯月十一日草津の宿を卯ノ剋過キ出立す。朝できたてのうばか餅上の分たぐいや船中のたのしみに入たり。又、なみ／＼のも随分よし。下の分つぶしあん也。上の分こしにて、三盆のさとうのあし、実に別段美味成事、名物程の事はある。土用中にもいたまぬ事を聞て、上下をかく侍りて、

へあつくともいたまぬあんの大内と田舎と違ふ姥か餅^{かな}あじ

船路八ばせの渡し大津分伏見江出ル。風もなし。八景を船より一目に見渡し、誠に道中一の気色絵にもかゝれず、筆におよはす。百年の寿命を船の中にて延す心地にて、名茶を入、かのうばか餅給りながら八景を夫々見て、たのしみいわん方なく、別てうばか餅甘露のことく思はれたり。

へ八景を一目に見るや矢ば瀬船

へきのふ迄絵にのみ見しる八景をけふそはしめて見るうれしき

狂哥

へお座敷に居るかとおもふ矢はせ船いつか大津に着にけるかな

へ石山の鐘聞^初く夏の風

へ真帆かけて登る矢は瀬や通し鴨

初旅に八はせの渡し^{真帆}さほさして船路にひく石山の鐘

へ名にしあふ山田やはせの渡し船打出のはまも見へる三井寺

此日中船無之。大船にて五ツ半時過キ乗船して帆かけ、四ツ時に大津へ着たり。八景八首詠めたくとおもへとも、名景にて中々何も出ぬ。追て詠めべしと思ふ也。大津の車牛、江戸の三ざうばい大牛にて、車の輪も大きく牛車の道、下に。石引詰有之也。駅路にさはらぬためと見へたり。下の方石敷あるに、石も自然と車の輪の通りたけへりてある也。

へ名に聞し牛も大々きく車道けにも大津の路を賑はふ

先きに渡船のうちより見渡膳所の城からめて要害よく水きはには石垣手厚き事見事也。其気色尤よし。瀬田の橋、是は組立之橋にて、こと成橋也。名所の程思ひしりたり。

名に高き^{ゆき、わたせ}のほりくたりの瀬田の橋昔たくみのほまれをそ見る

へ瀬田の橋江戸にもほしや淀の鯉

同大橋京間長九十六間間を置いて小橋三十間也。橋料は五千石付なり。兼て伏見迄社中の内、迎の義承知致候所、矢は瀬を渡り付候て見へけれ。雌雄の牛数不知、色々荷を付下りければ、追分の手前に谷元四郎、中嶋虎蔵、其外一兩人迎に出来りければ、狂哥して、

へ迎ひ牛大津の路の追分ヶの谷からのつと見ゆる寅象

迎の弟子来れば、都合人数都合拾貳人成。賑かにて面白し、藤森社に詣て、

へ伏拝みゆかりの色や藤の森

八ツ時前、伏見あたらし町富田屋六右衛門方、紀州の御出入の内、右の方着、休。一統息休す。八ツ半比、京大坂へ。御逗留の藤堂公御下りにて、右富田屋分海の方へよる式丁斗先き本陣へ御着の旨、

申聞候に付、幸い事、尤道中の義故、野袴羽織の俣にて、本陣へ御着。歎に出る。能洲柴田七九郎面会す。直に申上に相成、御逢有之大坂勘進能番組出板致候は、早々直に大坂表留守居迄差出候様被仰候。

一金式百疋 御酒肴代として被下

一金三百疋 右は道中の御用付として被下

右存も寄らす到来物に付、富田屋にて一種申付、弟子礼へ振舞。主人は何分酒のめす、例の茶にて物語す。

おもひきやけふ伏見にて津のとのに着歎にいつることとは

同夕々船支配。弁当等入込三十石船にのり、中の間四疊敷、弟子四五人并当ひらき、一銚子かはし、淀川のけしき、淀の城、水車の様、枚方のくらはんか。扱、夜中川の賑やか、両国の川筋のことく、のほり下り船あまた。月もあり、けしき面白見ゆ。夫々枕を付、ふしたり。何分川のけしき面白、しはらく詠めたり。月の出て候しを、融とやらのうたひ、ロンキとか文句思ひ出たり。ふかくさ山合夫々文句つゝ、き実も其通り也。古人は能々名所をくわしく并し候物なりと感入候。淀川をつゝ、み、あみ嶋にあげほの、けしき、言はん方なき程もなり。卯月十二日卯の下剋過キ、難波津八軒屋の手前、社中内々川岸へ船着き、小松原始、又左衛門、其外拾人程、船迄迎に参り、具足、鎗、道具、両掛け等、夫々かこの者も迎に参り、供立揃、齊藤町小松原傳右衛門宅旅宿と定、目出度着致す。門二つ引高張まく紋付打。今明日休息。十四日朝着候のつもり、届、両町奉行所着届に出。尤、さけ刀にて玄關上る事也。

へ今に着くくらはんか聞く夏夜船

枚方のくらはんか船下戸上戸なにをくはうと自由なりけり

枚かたの喰はんか船古風なり呼ば何をといふに興なし

旅日記の間にしるしおきわすれ、爰へ出す。近江路より大津迄百姓家とおほし在方、又町通りもあり。青梅を漬あるを干もあり、又家ことに炭墨の様、真黒のこを梅へ付。各青梅のすみい匂ひしらて、道ばたにむしろを干たり。日中のほせて香つよし。何に成そと聞せ侍りしに、紅作しほりの問屋へ何れもおろすよしにて、初てしりぬ。

青漬の梅真黒にほしたるをきけはへにやへおろすといふなり

実おひやの様成所幾千樽もあり。夫を真黒くして干なり。家ことにかくなんあり。何万石といふ数しれす。

大津の分

大津絵の団扇子ともに土産かな

同 つむ斗家ことにあり

紡錘もあせ女房に頼む目利かな

ふしみ十露ばん斗家ことにあり

段々帰一倍一夏す、し

『己未安政六年二月吉日ヨリ 興行上坂御祝物帳』

二月

一、黒天鶴絨半襟夜具一式

三月十二日

永井奥様ヨリ

銘和歌草二重箱入

一、箱入多葉粉二斤 一、小菊十帖

高安三太郎様

一、半切 一、日光とうからし一箱

正覚寺様

一、かた衣一 一、干鮭二尺

松前様

一、金三百正

松平和泉守様

一、白銀三枚

伊達遠江守様

一、同式枚

薩州様

一、御錢別金貳百正

大藏庄左衛門様

一、御扇衣地一包 一、御ゆかた地一反

鷺仁右衛門様

一、にしき絵一包

大倉利三郎

一、錦絵六拾五枚 一、御看一折 鯛さより

いなた 松井様

一、白銀貳枚

松平大和守様

一、細上布一反 一、御看 金千ひき一包

高輪御勝様より

一、御国たはこ 一、御国ぼん 一、交看たいほら

染野様

一、水引一わ 一、のり入二帖

お浦方

一、金百正

梶川喜兵衛

一、銀五十枚一包 一、御のし目一反 一、御うら地一反

一、まはた二袋

太田備後守様

一、蠟燭一箱

片岡和左衛門殿

一、交看 ほら一 嶋たい一 あわひ三

とふふや又藏 漬物や喜八 瓦や傳次郎

一、煙草二斤

伊勢や佐兵衛

一、さらし一正 一、御看たい一系ひ二一折 宝生金五郎様

一、金貳百正 一、にしき絵一包

観世佐吉様

一、金五十正 一、たばこ一箱

能勢覚兵衛様

一、御看 金三百正

近藤太左衛門様

一、はかた帶地一包

貞光庄吉殿 春藤次郎兵衛殿

一、両掛ケ泥あし

貞光朝之介殿 清水助五郎殿

一、金二百正 一、金千正

大黒や喜兵衛

一、長上下一包 一、銀三枚

湯嶋伊八郎殿

一、猪口十箱 一、たばこ入三

上杉昌寿院様

一、干のり三箱

酒井様

一、にしき絵一包

金春又次郎様

一、半切一 一、風呂敷一

大原正五郎殿 大友勘之丞殿

一、煙草箱入三つ入一箱二つ入一箱 老入五箱

春日友次郎殿 高橋鉄三郎殿

一、のり入二帖 一、水引長一わ

遊屋半左衛門

一、のり入三帖 一、小さく一足

花や伊三郎

一、鯉節一箱

此家主 辰五郎

一、風呂敷五

内田權兵衛

一、にしき絵廿 一、千よかみ四

高安彦十郎様

一、うちは十

諸井金太郎殿 高井久八郎殿

一、にしき絵一包

大倉龜吉

一、御調一箱

河内や茂吉

一、半切二 一、竹つ、十

長命勘三郎殿

一、小菊二束

一、小菊二束

一、小菊一束

一、菓子一箱

一、のり五帖

一、看 いなた二こち二一折

一、鯉節一袋三入

一、茶つぽ茶入 一、菓子一箱

一、たばこ一包

一、半切五

一、にしき絵箱入一箱 一、煙草一箱

一、うちは七本

一、小菊五帖 一、かつをふし二

一、御上下料金三百疋

一、交看一折

一、千のり三帖

一、金貳百疋

一、銀二枚一包

一、土佐鯉節一袋

一、小菊一束 一、茶一箱

一、紋付麻上下二具

一、ば正布一反

一、煙草入一箱

幸五郎次郎様

威徳三郎次郎殿

深原善左衛門様

金春熊次郎様

心光院様

金剛右近様

大蔵助之丞殿

村井清蔵

鼠坂

福王駒之丞殿

山田藤右衛門様

田中金三郎殿

三蔵堂様

観世三十郎様

観世太郎様

さかなや源次郎

秋田様

牧野備前守様

長野甚左衛門

鷺徳次郎様

加納遠江守様

田畑清太夫様

中村平三郎殿

一、御のし目 一、小袖

一、すし一重

三月七日

一、しまたい一つ 一、あはひ四つ

六月廿六日

一、銀三枚

一、同三枚

一、金千疋

一、銀三枚

一、同三枚

六月廿二日よろこひに

一、看 かわいい二 いなた二

一、す、き一 黒鯛二

一、御肴料 仁朱

同廿四日

一、看一折

同廿五日

一、看 いさき三 糸ひ

一、うなき二束

一、かつお一籠

同廿八日

一、看大こち二本

一、ほら三本 一、こち二本

伊達入道様

地主様

よこ町とそや

留まい

あき様

紀州様

備前様

あき様御銀座様

龍や

村井

戸田様御両人

長屋三間

こふや吉五郎

茂吉

つきじ高安様

利三

松井三

同廿九日

一、金二百正 御肴料

同晦日

一、晒布一疋 一、金二百正

七月二日

一、きじ一疋 一、白銀老まい

九月三日

御着飲におさかな代 一、金五拾正

高輪御晴様

山口様

池田様

松枝竹五郎